

Eメールでの作文添削パターンとフィードバック方法

The Ways and Patterns in Which Advisers Respond to a Learner's Writing by Email

鈴木美希（東京農業大学）・武田知子（恵泉女学園大学）

SUZUKI Miki (Tokyo University of Agriculture), TAKEDA Tomoko (Keisen University)

要 旨

本研究では、武田・鈴木（2008）のEメールでの3つの作文添削パターンの特徴を分析した。添削パターン1, 2は、形態的要素、修辭的要素などFB対象は広範囲で、直接訂正や下線や記号で訂正箇所を示す「指摘」、文章の形の「コメント」によりFBをしていた。パターン3は形態的要素に対し、「指摘」のFBが多かった。添削者の意識は、パターン1, 2はどのようにFBをするのかについて、パターン3はどこにFBをするのかに向けられていた様子が見られた。

This study analyzed the characteristics of three patterns in which feedback was given to a learner's writing by email found in the study by Takeda & Suzuki (2008). Patterns 1 and 2 employed both explicit and implicit feedback to widely address grammatical and constructional errors. Pattern 3 used explicit feedback to address grammatical errors. It was found that the advisers who gave Patterns 1 and 2 feedback were conscious of how they gave feedback to a learner's writing. On the other hand, the advisers who gave Pattern 3 feedback were conscious of where they gave feedback.

【キーワード】 作文添削, Eメール, 添削パターン, 作文フィードバック, 添削者の意図

1. はじめに

インターネットが普及した今日では、学習者が書いた作文に対しEメール（添付ファイルを含む）を用いて添削することが日常的に行なわれるようになった。筆者等も過去に、作文を鑑賞し合うための電子掲示板に投稿する学習者の作文を、Eメールにより添削した経験を持つ。添削の回数や個々の指摘、コメントの仕方など試行錯誤をし、Eメールによるより良い添削とはどのようなものかを模索していた。

上原（1997）は、作文の添削者はフィードバック（以下、FB）⁽¹⁾の意図を明確に持って添削をすると良いと指摘しているが、他者の添削方法を知ることがその大きな助けになると思われる。武田・鈴木（2008）は、Eメールによる作文添削における添削方法とその理由を探るため、5名の添削者にインタビューしKJ法で分析を行っている。その結果、添削には3つのパターンが見られ、添削者が作文のFB箇所を決定する際には「理解可能か判断」「教育効果」「書き手を配慮」「実行しやすさ」「負担」の5つの項目が、どのFB方法を用いるかの決定に関しては「教育効果」「書き手を配慮」「実行しやすさ」「負担」の4つの項目が影響を与えていたことを明らかにしている。本研究では、武田・鈴木（2008）のEメール添削に見られた3つの添削パターンをさらに詳しく調べるため、それぞれの添削パターンと①FB対象, FB方法との関係, ②添削者の意識との関係について分析, 報告する。各添削パターンの特徴を示すことにより、教師がEメールを用いて学習者の作文に対しFB

をする時に参照できる資料を提供したい。

2. 分析対象とデータ

分析対象としたのは、「さくぶん.org プロジェクト」⁽²⁾に参加して添削を行った1名(添削者A)と、実験的にその添削者と同じ作文を添削した4名(添削者B, C, D, E)の計5名である。全員、過去に上記プロジェクトに参加した経験を持つ。5名の日本語教育歴は1～11年で、添削者Eは日本語教育専攻の大学院生、他の4名は大学あるいは日本語学校の教員である。

データは、(1)学習者が「私の街」というテーマで書いた「作文」と他の人が同様のテーマで書いた作文に対する「感想文」の2本に対し5名が添削した作文10本、(2)その添削についてのインタビューである。作文の文字数は700～800字程度であった。インタビューは、添削者が添削理由や添削中に考えていたこと等を振り返って自由に語ったもので、長さは30分程度であった。

武田・鈴木(2008)では、添削箇所の示し方(色分けや記号の使い方、ワープロソフトのコピーやコメント機能の使い方等)に着目し、上記10本の添削済作文について、添削パターンを次の3つに分類した。

- パターン1: 作文の中で色分けや記号を用いて添削箇所を示し、直接訂正する。欄外にコメントを加える(添削者A, B)
- パターン2: 作文を全てコピーして、書き直す。添削した箇所は色を付けて示し、欄外にコメントを加える(添削者C)
- パターン3: パターン3, ワープロソフトのコメント機能⁽³⁾を用いて添削箇所を示し、コメント欄の中で訂正する(添削者D, E)

以下、オリジナル作文の一部と3つの添削パターンを示す。

【オリジナル作文】

私は、この感想文を読んだら、自分の故郷に自慢の気持ちを持つようになってきた。
私は、3歳のときからずっと〇〇に住んでいたの、育っていたときに美しさを鑑賞しなかった。でも去年日本に行って、今年△△に引っ越してから〇〇の自然の美しさを懐かしくなった。そして、〇〇のとても親切な町民やすごく気安い雰囲気を懐かしくなってきた。今、私は〇〇の美しさを悟ってきた。

【添削パターン1】(色分けや記号を使用し、添削箇所を蛍光ペン機能で示したり、直接訂正したりする)

私は、この感想文を読んだら、自分の故郷に自慢の気持ちを持つようになってきた。
私は、3歳のときからずっと〇〇に住んでいたの、育っていたときに美しさを鑑賞しなかった。(→美しさに気づかなかった?)でも去年日本に行って、今年△△に引っ越してから〇〇の自然の美しさを懐かしくなった。そして、〇〇のとても親切な町民やすごく気安い(→温かい・明るい・友好的な・気さくな・など)雰囲気を

懐かしくなってきた。今、私は〇〇の美しさを悟ってきた（→美しさに気づいた・美しさがわかる・など）。

【添削パターン2】（作文全体をコピーして書き直し、添削箇所を蛍光ペン機能で示す）

私は、この感想文を読んだら、自分の故郷に自慢の気持ちを持つようになった。私は、3歳のときからずっと〇〇に住んでいたが、そこで育っていたときには美しさをよく分かっていた。でも去年日本に行って、今年△△に引っ越してからは、〇〇の自然の美しさが懐かしくなった。自然だけではなく、〇〇のとても親切な町民やすごくアットホームな雰囲気が懐かしくなってきた。今やっつと、私は〇〇の美しさがわかってきた。

【添削パターン3】（コメント機能を使用し、直接訂正する）

私は、この感想文を読んだら、自分の故郷に自慢の気持ちを持つようになってきた。私は、3歳のときからずっと〇〇に住んでいたのので、育っていたときに美しさを鑑賞しなかった。でも去年日本に行って、今年△△に引っ越してから〇〇の自然の美しさを懐かしくなった。そして、〇〇のとても親切な町民やすごく気安い雰囲気を懐かしくなってきた。今、私は〇〇の美しさを悟ってきた。

読んで
故郷を自慢するき気持ちを持つようになった
大きくなるまでその美しさを意識して見ることはなかった
「でも」は話し言葉です。 →「しかし」
が
とても親しみやすい雰囲気が
を改めて感じている

3. 結果

3-1 添削パターンとFB対象、FB方法の関係

3つの添削パターンは、学習者の作文のどの部分をFB対象とし、どのようなFB形式をとっているのだろうか。上原（1997）の記述式フィードバックの分類を参考にし、FBが行われている対象を①形態的要素、②修辭的要素、③作文全体、④内容の4つに分類し（表1）、さらに、どのようなFB形式がとられていたのかを対象ごとにまとめ、分析を行なった。

表1 FB対象の分類

FB対象	具体例
①形態的要素（文法、表記）	北海道に1年間留学する間
②修辭的要素 （構成、一貫性、論理性など）	段落から段落への流れをもう一度考えるといいと思います。段落の順番を変えたり、接続詞（まず、次に、また、ですから、…）を使ったりしてみてください。
③作文全体（作文全体の出来栄え）	〇〇さん自身の留学体験を交えて、うまく書きましたね。
④内容 （書き手に送るメッセージ）	〇〇さんは、九州にも行ったことがあるんですね！私は、一度だけ福岡に行きました。北海道でも、いろいろなところに行っただすね。私も行ってみたいところばかりです。

その結果、FB対象は、各パターンによって特徴的な違いが見られた(表2)。添削パターン1, 2は、形態的要素, 修辭的要素, 作文全体, とFB対象は広範囲だった。また、パターン1の添削者Aは、内容に対してもFBをしていた。パターン3は形態的要素に対しFBをしていた。

FBの形式(表2)についてみると、パターン1, 2は、形態的要素については指摘⁽⁴⁾とコメントで、修辭的要素や作文全体、内容(添削者Aのみ)についてはコメントで、と2つの形を用いてFBが行われていた。パターン3は、形態的要素について指摘、コメントをするFB(添削者D)と、指摘のみをするFB(添削者E)が行われていた。

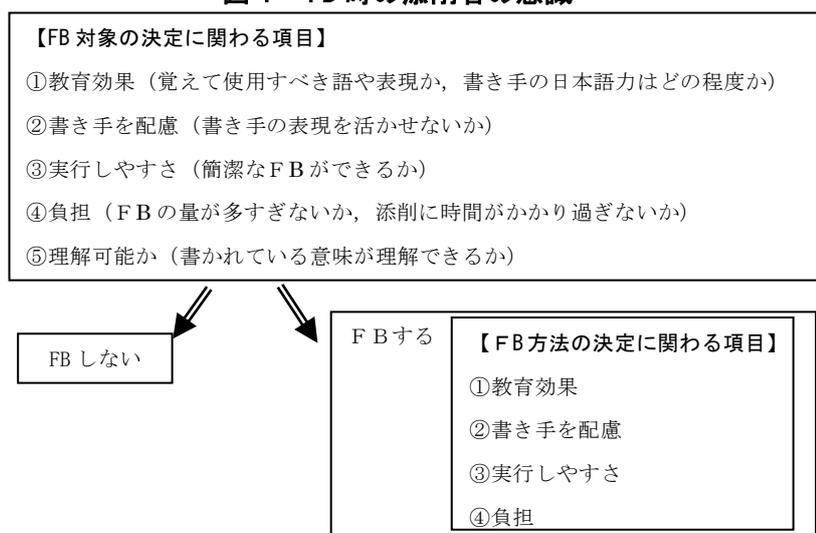
表2 添削パターンとFB対象・FB形式

		添削パターン1		添削パターン2	添削パターン3	
		添削者A	添削者B	添削者C	添削者D	添削者E
		FB形式				
FB 対 象	①形態的要素	指摘・コメントによるFB				指摘によるFB
	②修辭的要素	コメントによるFB			FBなし	
	③作文全体	コメントによるFB			FBなし	
	④内容	コメントによるFB	FBなし			

3-2 添削パターンと添削者の意識

添削には3つのパターンが見られたが、それぞれの添削者は何を意識してこのような添削を行ったのだろうか。添削者へのインタビューをKJ法で分析した武田・鈴木(2008)では、作文のどの部分にFBをするかという「FB対象の決定」と、どのような方法でFBするのかという「FB方法の決定」に、語りがまとめられている(図1参照)。

図1 FB時の添削者の意識



武田・鈴木(2008)を基に作成

さらに、FB対象の決定については、「①教育効果」「②書き手を配慮」「③実行しやすさ」「④負担」「⑤理解可能か」の5つの下位項目、FB方法の決定に関しては「①教育効果」「②書き手を配慮」「③実行しやすさ」「④負担」4の下位項目があり、FBを実行するまでに添削者は様々な影響を受けていることが報告されている。表3に、各項目の典型的な語りの例を示す。

表3 各項目の具体例

FB対象の決定	
①教育効果	「自然は人間の一生にとっても大切な事だと思います。」あ、ここもちょっと迷ったんですよね、実は。「自然は人間の一生の中でとても大切な役割を果たします」とか、正確に言えばそういうことなのかなと思ったんですが、この人の日本語力だと、このぐらいかなと思い、そのままですね。(添削者D)
②書き手を配慮	で、ここで多分、私だったら、函館は入れないかもと思ったんですけど、やっぱり、ちょっと〇〇さんが書いたものを生かしたいという気持ちがあったので、このような形になりました。(添削者D)
③実行しやすさ	それから、「関連づけませんが」というのは、全く触れずに、「想像できませんが」に変えてしまいました。この、誰かが、ほんとにちょっと、わからなくて、うーん、まあ、あなたに、っていうことなのか、わからない、ここはちょっと、変えられなかったので、ま、誰のことですか、っていうふうにして、で###があるでしょう、とそのままにしました。(添削者C)
④負担	あんまり一人に時間をかけちゃうとやっぱりできないっていうね。だいたい夜中とかにやるんですけども体力が落ちてきたりするのでやっぱりある程度であげてどんどんやっていくって言う感じは私の中にはいつもあるかなあ。(添削者B)
⑤理解可能か判断	大丈夫かなというのはそのままにして、やっぱりちょっと気になるなというのだけ訂正していています。(添削者A) 「函館山でした」の「でした」は違和感ないだろうと思います。何も触れません。(添削者E)
FB方法の決定	
①教育効果	それによって正解がひとつじゃなくて、いくつか可能性があるんですよというのを示せるかなというのと、で、そこからひとつ選ぶためには、調べなきゃいけない、考えたりしなきゃいけないと思うので考えるきっかけにもなるかなあ。(添削者A)
②書き手を配慮	選択肢を挙げる。で押し付けにこうしようっていうんじゃなくて、「こうでしょうか」ってそれともこうでしょうかって問いかけるってことと、それから何となく英語で言ったらこうなのかなってこと、3つぐらいが私の中で交錯してこういうように、こういうアドバイスになったのかな、と思います。(添削者B)
③実行しやすさ	「〇〇に住んでいたの」、ここは、もう正解を示しちゃってますね。これは説明するとちょっと長くなるから、もう説明しないで言っちゃってるって感じがあると思います。(添削者B) あと、もう一つは、私もほんとに添削をいつもしてるんですが、逐一、なんかこう、それに赤を入れたり消していったりすると、だんだんごちゃごちゃしてわからなくなってしまうので。(添削者C)

④負担	<p>パソコン操作していて、(中略) すごく操作が辛いんですね。目とか神経が。でもこの操作は、本当に左手と右手を使うだけでタッタタッタできて、何も要らないんですよ (添削者B)</p> <p>こういう方法をとった一番の理由は、もし、学習者が時間がなくて、早く、添削したものを載せなきゃならないときに、このまま、黄色のところを消して、切り貼りして載せることができるので、時間的な、あの、なんですかね、ことを考えました。(添削者C)</p>
-----	--

* ##は聞き取り不能であったことを示している。

本研究では、各添削パターンの添削者の意識がどこに向けられていたのかを見るため、インタビューでの語りからでてきた項目が、各添削パターンにどのように現れているのかを分析した。結果は、表4のとおりである。

表4 添削パターンと添削者の語り

		FB 対象の決定					FB 方法の決定			
		① 教育効果	② 書き手 を配慮	③ 実行しやすさ	④ 負担	⑤ 理解可能 か判断	① 教育効果	② 書き手 を配慮	③ 実行しやすさ	④ 負担
パターン1	添削者A	—	—	●	●	●	●	●	●	—
	添削者B	●	—	●	●	●	●	●	●	●
パターン2	添削者C	—	—	●	—	●	●	—	●	●
パターン3	添削者D	●	●	●	●	●	●	—	—	●
	添削者E	●	●	—	—	●	—	—	—	—

* ●は言及あり，—は言及なしを示している

FB 対象の決定について「ちょっと迷ったんですよ (中略)，このぐらいかなと思い，そのままですね (添削者D)」などと、多く語っているのはパターン3の添削者である。反対に、あまり言及していないのはパターン2の添削者である。FB 方法の決定については、パターン3の添削者はほとんど言及していない一方、パターン1、2の添削者は、「選択肢を挙げる。で押し付けにこうしようっていうんじゃないくて、こうでしょうかってそれともこうでしょうかって問いかけるってこと (添削者B)」、「このまま、黄色のところを消して、切り貼りして載せることができるので、時間的な、あの、なんですかね、ことを考えました。(添削者C)」等、どうしてこの添削方法を用いたのかについての語りが多く見られた。

各パターンとそれぞれの添削者の意識に明確な関係性は見られないが、パターン1、2の添削者はどのようにFBをするのかについて、パターン3の添削者はどこにFBをするのかについて意識し添削を行っていたと言えるのではないだろうか。

4. まとめ

パターン1は、FB対象が広範囲で、FB方法も指摘とコメントの2通りと多様なFBができる。その一方、インタビューでこのパターンの添削者からは、時間がかかる、添削者の負担が大きいという問題点も語られていた。作文全体を書き換えるパターン2は、学習者の元の作文にとらわれず、単語、語句レベルを超え、文の流れに沿ったFBがしやすいが、

学習者がFB箇所を直すことなくそのまま使用する可能性もある。コメント機能を使うパターン3は、単純で添削の作業がしやすいが、修辭的要素や作文全体のFBはしにくい。こうした添削パターンの特徴を理解し、その時々目的に応じて添削者が使い分けをすることがより良い添削へとつながると言えよう。

また、インタビューの分析から、パターン1, 2の添削者からはFB方法の決定について多くが語られ、「どのように直すか」を意識している様子が見られた。一方、パターン3の添削者は、FB対象の決定についての語りが多く、「何を直すか」に意識が向けられている傾向が見られた。

このことから、1つの添削パターンに固執せず、学習者や作文の目的に合わせて多様な添削パターンを使い分けることによって、添削時の意識化が促されると言えるのではないだろうか。Eメールを用いた添削では、相手と対面していないことから迷いが生じるが、何をどのように直すのか多面的に意識し、自らモニターしながら添削を行うことが、その迷いを解消する方策の一つとなると考える。

注

- (1) 本稿では、個々の指摘やコメントをFB、一編の作文に対するFB全体を添削と呼ぶこととする。
- (2) 「さくぶん.org プロジェクト」とは、電子掲示板に作文を投稿し、参加者が相互に自分たちの書いたものを鑑賞し合うプロジェクトである。参加者は日本人大学生と国内外の日本語学習者で、作文の添削を希望する日本語学習者に対してEメールによる1対1の添削が行われる。
- (3) Microsoft社製のWordで文書中に吹き出しを追加し、その吹き出しの中にコメントの文字列を入力することができる機能である。実際は、コメントを付けた箇所と吹き出しが線で結ばれて表示され、吹き出しを非表示にすることもできる。
- (4) 上原(1997)は、添削箇所を直接訂正したり、下線や記号等で示したりすることを「指摘」、文章の形で注釈をつけることを「コメント」としている。

参考文献

- (1) 上原久美子(1997)「日本語教育における作文の『記述式フィードバック』についてーコードによる分析の試みー」『南山日本語教育』4号, pp. 135-161
- (2) 武田知子・鈴木美希(2008)「Eメールにおける作文添削者の工夫とその理由」『日本語教育方法研究会誌』Vo. 15 No. 1, pp. 12-13